

アウクスっ子の日常発見

北口 采香

私は調査研究のテーマとして、アウクスブルク市の教育を選びました。私はいま大学で教職課程を受講しているので、外国の教育の指針や子どもたちの様子に興味がありました。訪問した教育関連施設では、短い時間ながらも、施設内視察と丁寧な説明、さらに質疑応答等充実した訪問となり、多くのことを学ぶことが出来ました。私が見たアウクスブルクの教育は、そのほんの一部かもしれませんが、日本の教育との違いにいろいろと気づかされる部分がありました。今回の貴重な体験を、将来自分が教育の現場に立ったとき、様々な形で生かすことが出来ればと思います。

Contents

- 0, ドイツの教育制度 概略
- 1, ルドルフ・ディーゼルギムナジウム (9/18)
- 2, 保育施設 (9/19)
- 3, アウクスブルク大学 (9/19)

0, ドイツの教育制度 概略

訪問先の報告に入る前に、簡単にドイツの学校制度を紹介したいと思います。ドイツの義務教育は多くの場合9年間です。日本ではこの9年間で小学校・中学校で過

しますが、ドイツの子どもたちはこの期間に大きな進路選択を行います。第4学年(日本の小学4年生に相当)まではほとんどの子がグルントシューレに通いますが、その後ミッテルシューレ、レアルシューレ、ギムナジウム、その他の学校に進学します。

まず、ミッテルシューレは就職を目指す進路です。第10学年(日本の高校1年生に相当)を終えた後は、主に職業学校へ通いながら企業内で職業訓練を受ける「デュアルシステム」に進みます。次に、レアルシューレは専門職を目指す進路です。第10学年修了後、前述のデュアルシステムに進む場合と、上級専門学校に進む場合に分かります。そして、ギムナジウムは大学進学を目指す進路です。第12学年(日本の高校3年生に相当)まで進んだ後、アビトゥーア(ギムナジウム卒業資格試験、合格により大学入学資格を得る)に臨みます。日本では大学入試で学生の選抜が行われますが、ドイツでは高校(ギムナジウム)卒業試験がその位置に置かれているようです。

日本に比べて進路の分岐が早いドイツですが、早い時期から専門的な教育を受けられることは、この制度の利点となっています。また、これらの学校間での転校・編入等も可能です。

1, ルドルフ・ディーゼルギムナジウム

私たちが訪問したルドルフ・ディーゼルギムナジウムは、アウクスブルク市内にある70校のギムナジウムのうち、2番目に大きいものだそうです。全校生徒は1060名で、男子が600名、女子が460名です。この学校では新学期が9/9に始まったばかりとのこと。入ってくる新入生はほとんどが10歳の子どもたちです。時間割は1コマ45分で、午前には休憩が2回（各20分、15分）午後には1時間のお昼休みがあります。この間生徒たちは売店や食堂を利用したり、自宅に帰って昼食をとるそうです。



壁面の生徒作品

授業に関しては、生徒たちは自然科学系と言語系に分かれます。自然科学系の生徒は情報の授業が必修で、エクセルやEメール、プログラミング等の学習をします。また必修となっている英語のほか、第2外国語としてフランス語かラテン語を選択できます。一方言語系の生徒は、情報の授業は一年間のみで修了します。英語と第2外国語が必修となっており、第3外国語としてスペイン語を選択できます。また化学の授業は両系統の生徒が必ず学びます。教師の監督の下自主的に実験を行ったり、卒業試験の実技科目として化学実験が課せられることもあります。



化学実験室

こうした日々の勉強に欠かせないのが教科書です。この学校では、教科書は無料貸与だそうです。日本では一人に各一冊支給され、自由に書き込みやラインを引いたりすることができますが、この学校で貸与された教科書を破損すれば、弁償を請求されることもあるのだとか。教科書の採択は学年担当教諭だけでなく、PTAも参加します。教科書会社が文科省に原稿を送付し、文科省が指定リストを作成します。PTAもあらかじめ教科書見本に目を通し、このリストの中から採択を行うそうです。保護者がここまで学校の運営に関わっているのは、日本にはない特色だと思います。

私たちは2班に分かれて、物理と英語の授業をそれぞれ見学させていただけることになりました。私が見学したのは英語の授業です。生徒は第9学年ですが、教室には明らかに年齢が異なっているように見える生徒が何人かいました。あとで先生に質問に答えていただいたところによると、14歳から16歳の子がいるそうです。これには2つの理由があり、ひとつは留年のため。ギムナジウムの成績評価は厳しく、1を最高とする5段階評価で、2回連続で5をとると落第だそうです。日本よりも留年は珍しく

なく、現在の学年の内容をしっかりと理解してからでないと、進級してもその子のためにならないという先生の配慮もあるようです。もうひとつの理由は、入学時期に差があるため。バイエルン州では9月に新学期が始まりますが、8月生まれの子どもは、前年の9月～その年の7月生まれの子達と同級生にさせるか、その年の9月～翌年の7月生まれの子達と同級生にさせるかということ、両親が選択する場合があります。英語の授業は週5コマあり、文法より会話や発言を重視しているそうです。授業は全て英語で行われていました。先生の発問も、生徒の回答も、全て英語。日本の中学2～3年生に相当する生徒たちですが、日本の子どもたちよりはるかに英語運用能力が高いことに、衝撃を受けました。この学校では第5学年（日本の小学5年生に相当）から英語教育が始まり、第2・第3外国語も充実しています。日本の外国語教育は遅れをとっていることを、痛感させられました。ドイツ語は英語と似た系統の言葉なので、単語や文法に共通点があることも、英語が得意な理由でしょうか。

ドイツでは州ごとに学校システムが異なるそうです。日本のように統一的な教育指針でないことは、生徒の要求に柔軟に対応できる利点があります。一方入学は住所でおおよそ決まるそうなので、学校間の教育・学力の格差はどのようになっているのかが今後知りたい部分です。ドイツと日本の学校現場の違いを実際に目にすることが出来た、とても有意義な訪問でした。

2, 保育施設

今回見学させていただいたのは、保育園と幼稚園がひとつになったような形の施設でした。施設内の子どもたちは、3歳までの保育園児が24名、3歳から6歳までの幼稚園児が50名です。そのうちなんと外国出身の子どもが85%もいるそうです。開園時間は6:30～17:00で、その間いつでも親が子どもを預けたり、迎えに来たりすることが出来ますが、コアタイムと呼ばれる8:30～13:00には、子どもたちは施設にいないければなりません。閉園時間については親にアンケートをとり、希望を聞き入れているそうです。この施設は月～金に開園していて、長期休暇は12/24～1/1と、8月中の約2週間です。日本と異なり、延長保育や休日保育がないことに私は驚きました。実際、17:00までこの施設にいる子は現在一人だけだそうで、ほとんどの親はそれまでに迎えに来ます。日本での保育所のように、親が勤務している間の単なる預け入れ場所ではなく、集団生活を学び、社会性を身につけるための場所としての位置づけが強い印象を受けました。施設の教諭はパート従業員や実習生を含め、保育園部門が7名、幼稚園部門が6名だそうです。料金は時間ごとの加算となるとのことでした。

子どもたちは施設に来ると、まず朝の集まりに参加します。そこではみんなで歌を歌うなど、集団で同じことをします。そのあとは自由時間です。子どもたちはあらかじめ自分で選んだグループに所属していて、そのグループの行う日中のプログラムに参加します。



かわいいレターボックス



お昼寝用ベッド

施設内にはカラフルなおもちゃや豊富な絵本、楽しい室内遊具、お絵かきセットなどがあり、それらを自由に使って遊びます。日本の保育園・幼稚園では安全面から敬遠されそうな電子部品の分解キットや、小さな豆のざらざら入ったトレイなどもあり、施設の子どものびのび遊ばせようとする姿勢と、それに応える先生たちの安全管理に感銘を受けました。またこの間に自由に定量のおやつを食べられるなど、全ての行動を子どもたち自身に決定させており、自主性・自律性を育てる教育が徹底されていました。



天窗から光が差し込むお絵かきスペース



豆トレイ

また施設には季節のイベントがあり、保・幼が別々に行うものと、合同で行うものがあります。森の日や夏祭り、クリスマスといった各イベントがあるそうですが、これも子どもたちの自由参加です。みんなで一緒に仲良く活動し、それが出来ない子は困った子とする日本の保育の一部の傾向とは、一線を画すものだと思います。私たちが訪問した日はちょうど午後から秋祭りがあり、入園してきたばかりの子に慣れてもらうため、芋スタンプ作りや自家製かぼちゃスープ作りをする予定でした。私たちは次の視察先に移動してしまいましたが、子どもたちは秋祭りを満喫したでしょうか？

3, アウクスブルク大学

町の中に溶け込むようにあり、街道からすぐ入ることの出来る場所にあるのが、ア

ウクスブルク大学でした。校内にはいくつかの大きな建物があり、その間を鮮やかな緑の芝生が囲んでいました。アウクスブルク大学は7学部からなり、生徒数は1万9000名。在学生の方に案内してもらいながら、校内を見学させていただきました。



晴天のアウクスブルク大学

まず訪れたのは図書館です。さすが大学の図書館といったところで、分厚く大きな本が棚いっぱいにならんでいました。蔵書は法律や経済といった分野ごとに分けられ、学部系統ごとに4館に分かれてそれぞれ配置されているそうです。それぞれの館は、ガラス張りの渡り廊下で結ばれていました。100職員が働く図書館の蔵書総数はおよそ250万冊で、全て貸し出しが出来ますが、半数は開架、半数は書庫にあります。



図書館内

利用時間について、平日は8:30~24:00、土曜日は9:30~24:00、日曜日は12:00~18:00です。深夜まで開いていることに驚きましたが、これは貸し出し冊数が少なく、図書館内で本を読むことが多いからだそうです。国民の祝日以外は通常開館しており、一般利用も可能です。図書館に探している本がないときは、無料で取り寄せることも出来ます。貸し出しはキャンパスカードというカードで行うことができ、プライベート機能がついているので、コピー機の利用も可能です。

図書館にはいくつか大変貴重な古書が収められています。私たちはゲーテンベルクの聖書複製を見学させていただきました。このような貴重な資料類を傷つけないため、図書館内はラップトップを除いてカバン類は持ち込み禁止、ロッカーに預けなければならないことになっています。



ゲーテンベルクの聖書複製

講義室では、いくつかの教室で試験が行われていました。座席は階段状になっており、窓の多い開放的な空間でした。大学の講義室というと殺風景な印象ですが、この大学の講義室にはコンクリートの滑らかな壁面に丸い窓があり、デザイン性も感じさせるものでした。



講義室

学生食堂も見学させていただきました。カラフルな色づかいの壁面と透明なガラス窓に囲まれ、とても明るい場所でした。料理の種類によって受付が分かれており、アジア料理のコーナーもありました。



学生食堂

以上で私の調査研究「アウクスっ子の日常発見」の報告を終わります。事前に私たちの視察先希望を聞いて、日程に取り入れてくださったアウクスブルク市、尼崎市、長浜市の関係者の方々に、この場を借りて

お礼申し上げます。本当にありがとうございました。各現地施設の方は、パンフレットやスライドなどを用いて私たちにとっても丁寧な説明を下され、さらに私たちの質問にも真摯に答えてくれました。通訳の方のご助力もあり、ただ見て回るだけでは気づくことの出来ない様々な発見をさせていただきました。全ての施設で、生徒・児童・学生が実際に活動する中を視察させていただいたことも、こちらにとって大変勉強になりました。一般の観光客には絶対出来ない経験をする事ができ、使節団員としてアウクスブルクを訪れることができた喜びとともに、その経験を様々な形で周囲に還元していかなければならないという自覚も感じました。この姉妹都市交流が両国の若者たちの未来へ向かう糧となり、いつまでも続くことを願います。

参考資料

http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2004_6/germany_01.htm